

『江帥集』前半部について

―登場人物と詠作年次等の考察(1)―

高野瀬 恵子

一 はじめに

『江帥集』は、平安後期に活躍した儒者大江匡房(一〇四一―一一二二)の家集である。伝本は、冷泉家時雨亭文庫蔵本^①と、その転写本である書陵部蔵本の二本のみ。全五二三首の七割余(三七四番まで)は自撰によると見られる。^②匡房の家集としては、他に有吉保氏蔵「匡房集」、京都府立総合資料館蔵「匡房卿家集」の二本が存するが、これらは江戸期になつてから勅撰集、私撰集、類題集等から抄出編纂された他撰家集であることが、先行研究によつて明らかになつて^③いる。

匡房は後三条・白河・堀河の三朝の儒家の代表であり、実務官僚としても活躍、『洛陽田楽記』『江家次第』『続本朝往生伝』等、多数の著作を残した。また、源経信と並ぶ和漢兼作の大家でもあり、白河・堀河・鳥羽三代の大賞会屏風和歌の作者ともなつて^④いる。従つて『江帥集』は、歌人としての匡房と、その時代の和歌を研究する上で貴重な資料であるが、集の成立と構成についての考察^⑤、及び匡房歌の特色を探る研究等がある程度なされているものの、集の詳しい読解は未だ行われていない。

筆者は私家集を中心として堀河朝の歌人を研究してきているが、これまで扱った歌人たちとの関連から『江帥集』に取り組みはじめた。先ごろ、他撰と考えられる後半部(三七五番から)に登場する人物等についての調査・検討の成果を発表し、^⑥現在はいき続き、前半部に登場する人物や場所、歌の詠作年次等に関して考察を行つて^⑦いる。

『江帥集』前半部の歌は、先行研究の指摘のとおり、勅撰集の部立に倣つて四季・釈教・賀・禪旅・離別・哀傷・恋・雑に整理されているため、同時の詠作も分散配列されている。従つて、集を読解するに当たつては、収載歌の詠作の場と年次とを再整理することが効果的である。そこで、時や場が明瞭な「承暦二年四月内裏歌合」や美作と筑紫への下向時の詠作等をひとまず置き、それ以外で人名・時期・場所名等が示された歌について整理し検討している。ここでは、その成果の一端を、「天皇家の人物」「撰閑家の人物」に分類して述べることに^⑧する。

なお、参考として、後半部に関する拙稿の要点を示しておく。

①『江帥集』の後半部(三七五番)には、男性よりも女性の名のほうが多く見られる。周防内侍、六条院堀河、令子内親王家女房の肥後・摂津・大貳の三人など、いずれも堀河天皇時代に活躍した女房歌人ら

である。

②『江帥集』で「京極の摂津君」「京極の大式」と呼ばれる二人は、白河院皇女令子内親王の女房であるが、内親王が摂関家の養女的な存在でもあったことを反映して「京極」を冠して呼ばれたと考えられる。彼女らとの交流が目立つことは、匡房が院と摂関家の双方と繋がりが深かったことを物語る。

③大式は、大学頭などを務めた儒者・藤原季綱の妻となつて複数の子を産んだ可能性があり、その子の一人の実兼は『江談抄』の筆録者である。『江帥集』の贈答歌から見ても匡房とはかなり親しかったと想像される。

④後半部にのみ三度登場する三位殿は、堀河天皇乳母の藤原家子と見られる。家子は「帥三位」とも呼ばれており、晩年期の匡房の妻であったと考えられる。

⑤三位殿が摂津と贈答する四九二・四九三番詞書中の「卿の殿」は、匡房である可能性が高い。ただその場合、家集にその当人の死への弔問歌を含むことになり、異例である。

⑥前半部はその最後に白河・堀河二代の大嘗会和歌を置く形であり、これに続く後半部は贈歌や贈答歌が多く、末尾にやはり鳥羽院大嘗会和歌を置いている。後半部は、匡房没後、恐らくは比較的近い時期に、遺されていた詠草類を付加した部分と考えられる。

二 前半部に見える天皇及び天皇家の人物と歌

まず、天皇家の人物関連の歌を、集における呼称別に整理する。

く 鳥羽院の御くらゐの時、よふけてかりをきく (八三)

よをさむみいせのはまをぎわけゆけばころもかりがねきこゆなるかな (八九)

鳥羽院のとをくはぎの花を思、内直廬
みやぎのこのしたつゆのおもかげはこはぎがすゑやちしをならん (九〇)

鳥羽院のくらゐにおはします時、御前にて、はやしのは、やうやうくれなゐなり といふことをよめる
しぐれするいはたのおかのははそはらあさなあさなにいろかはりゆく (九四)

鳥羽院のいけのうゑの月
いけみづにうつれる月ぞさだめなきすむとやいはんやどるとやいはん (一〇二)

鳥羽院大井がはの遊宴
おほゐがはちるだにおしきもみぢばのみづのこころにあきにけるかな (一二四)

鳥羽院の御くらゐの時、殿上、あかつきの天雪
あさひにはうしろめたなしあはゆきのそらかきくもりあすみざらなん (一三九)

鳥羽殿の松影浮水
いけみづにまつちとせをうつしてぞちとせのかげもいろまさりける (一五六)

鳥羽殿の春宮と申し時、殿上、松哥在序
ちとせふるまつにかかれるふぢのはなきみがころものいろかとぞみ

1 鳥羽院・鳥羽殿・院

詞書にこの名が見えるのは、十四カ所ある。この「鳥羽院」とは白河院を指していることが竹下豊氏により既に指摘されている。

白河院（一〇五三・一一二九）は、後三条天皇第一皇子。延久四（一〇七二年）十二月即位。応徳三（一〇八六）年十一月讓位、院政を創始し、嘉保三（一〇九六）年八月に出家。

「鳥羽院」は白河院その人を指すほか場所をも示す。「鳥羽殿」は基本的には場所の明示であるが、その場の主催者としての白河院を意識した表現である。

鳥羽院くらゐにおはしますとき、殿上のうた、むめのはなかぜにほふ

ゆきずりの人のそでさへにほふかなむめのたちえに風やふくらん (一一五)

鳥羽院にて、やまのさくらをたづぬ題を

さくらさくよものしらくもひとかたにあしげのこまもあともさためず (一二六)

鳥羽殿のわたくしの哥二百がうち、ほととぎす、未出也

ほととぎすまつらさよひめならなくにひれふるばかりおしくもあるかな (一六六)

庭の木はをむすぶ、院のくらゐにおはしますとき三条内裏にてよめる、題者経信

庭のおもはつきもらぬまでなりにけりこずゑになつの日かずつもりて (一七六)

鳥羽殿にて、山家秋の心を

あきくればあさけのかぜのてもさむみやまだのひたをまかせてぞき

る 一五番歌「ゆきずりの…」は、白河院在位中（承保から承暦・永保を経て応徳までの間）の歌とは知られるが、他出や同時詠らしき歌を見出せない。

二六番歌「さくらさく…」も、他出や同時詠を見出せない。しかし、題は少し異なるものの、『中右記』寛治七（一〇九三）年三月十日条に次のような記事が見え、関連が考えられる。

太上皇為一条北辺花御覽有御幸、巳時許先御東北院、次御覽齋院花、次鳥羽殿、入夜還御六条殿、…（中略）…於六条殿小寝殿西面被講和歌、題云、処々尋花、（以下略）

二六番歌の「葦毛の駒も一方に跡も定めない」という内容からは、「山の桜をたづぬ」という題よりも『中右記』に言う「処々尋花」のほうが相応しいように思われる。

六六番歌「ほととぎす…」は、鳥羽殿での詠と思われるものの、やはり他出や同時詠らしき歌がなく、詞書の「わたくしの哥二百」の意味など、なお検討中である。

七六番歌、「庭の木、葉をむすぶ、院の位におはしますとき、三条内裏にてよめる、題者経信」と詞書にある歌は、応徳元（一〇八四）年四月十九日の詠。『金葉集』（夏・九六・九七）に院御製と経信歌が見え、『経信集』（五七番詞書）によつて題の変更があったことも知られる。即ち、十八日に匡房に献題の命が下り、「小倉山郭公」で十九日披露予定であったが、当日夕刻になつて院が「昨日題猶不快」の故に改めて経信に題を献じさせた、という。詞書末尾の「題者経信」には、或いはその辺りの事情も込められているか。この集で経信の名が見えるのはここだけである。

八三番歌「あきくれば…」は、鳥羽殿での詠作とあるが、他出や同時詠を見出せない。

八九番歌「よをさむみ…」は、竹下論文で「鳥羽院」白河院の論証に取り上げられた歌であるが、『統詞花集』（秋上・二〇二）及び『和歌一字抄』（四九五）に採られており、題が『統詞花』では「旅中聞雁」、「一字抄」では「夜深聞雁」となっている。詞書により白河院の在位時の歌とは知られるが、具体的な年次は未詳。

九〇番歌「みやぎの…」も、「一字抄」（二二）に見え、「遠思秋萩」題で、三句が「おもければ」の形になっている。九四番歌「しぐれする…」は『玉葉集』（秋下・七九二）に採られているが、その詞書は「鳥羽院位におましましける時、御前にて林葉漸紅といふことをよみ侍りける」となっており、恐らく『江帥集』から採録した結果、天皇を取り違えていることがわかる。これらも詳しい詠作年次は未詳。

一〇二番歌「いけみづに…」は、次のように『金葉集』に、白河院御製院及び経信詠があり、『中右記』にも詳細な記録が見えることから、寛治八（一〇九四）年八月十五夜の詠と知られる。

寛治八年八月十五夜鳥羽殿にて甑池上月といへることをよませ
給ひける
院御製

いけみづにこよひの月をうつしもてこころのままにわが物と見る
（金葉・秋・一八〇）

大納言経信

てる月のいはまのみづにやどらずはたまゐるかすをいかでしらまし

（同・一八一）

他にも、師実（続古今・秋上・四〇二）、俊忠（続拾遺・賀・七四〇）、公実（続後拾遺・賀・六一九）、忠実（新千載・慶賀・二三二五）らの

十二月、讓位。延久五年五月、崩御。匡房は東宮學士として近侍し、天皇の人となり『続本朝往生伝』『江談抄』等に記している。後三条院の名が見えるのは、次の五カ所。

後三条院御時、殿上人、ふねのうちの月

つねよりもつきのひかりのさやけきはあまのかはらにふねやきぬらん
（九五）

後三条院御時、大井がはのせうえう

おほるがはるせきにももみぢばはすぎにしあきのとまりなりけり
（一一一）

後三条院すみよしにおはしましし哥

すみよしのちよにひとたびあひぬればまつもかひあるみゆきなりけり
（一六四）

後三条院におくれたてまつりてのとし、ゑそう寺にてのやまのにしにおちしてる日のかげをこふるまにもみぢのいるとなりけるかな
（一七八）

後三条院におくれたてまつれるとしのつこもりに、すみよしの神主国基

はるにあはんことはちかしとおもへどもくれゆくとしのおしくもあるかな
（三〇八）

かへし

ふちころもぬぎもやするとおしければとしのかへらんこともほになく
（三〇九）

このうち九五番歌「つねよりも…」は、詳しい詠作年次は未詳であるが、次の『後拾遺集』歌と同時詠の可能性がある。

船中月といふ心をよみ侍ける

源師賢朝臣

詠が勅撰集に採られている。『中右記』によれば、出題及び序者を勤めたのはこの年太宰帥となった経信である。

一二四番歌「おほるがは…」は、内容から見て次の俊忠詠と同時詠である可能性が高い。

寛治五年十月白川院大井川に御幸せさせ給うて、落葉満水といふことをよませ給うけるにつかうまつりける
権中納言俊忠
大井河水の流もみえぬまでちる紅葉ばのうかぶけふかな
（新拾遺・冬・五八八）

また、『中右記』寛治五（一〇九二）年十月一日条に

太上皇自鳥羽殿以船歴覽大井河紅葉、入夜還御六条院、被講和歌、題云、落葉満水、講師木工頭隆宗朝臣也、

とあるので、詠作年次は寛治五（一〇九二）年十月一日と考えられる。

一五六番歌「いけみづに…」は、次の師実歌と題・場所ともに一致するので、同時詠と考えられる。

寛治元年十一月鳥羽殿にて、松影浮水といふ事を講ぜられける
京極前関白太政大臣
に

千とせへて花さく松のいとどしくのどけき水に影ぞうつれる

（新続古今・賀・七五二）

『中右記』寛治元（一〇八七）年十一月二十五日条に、「晁院有御幸鳥羽殿、入夜還御」という記事があるので、この日の詠であろう。

一五七番歌については後述。

2 後三条院

後三条院（一〇三四―一〇七三）は後朱雀天皇第二皇子。寛徳二（一〇四五）年正月、立坊。治暦四（一〇六八）年四月、踐祚。延久四（一〇七二）年

みなれざをとらでぞくだすたかせぶね月のひかりのさすにまかせて

（雜一・八三五）

一三一番歌「おほるがは…」は、今のところ、他出や同時詠を見出せない。

一六四番歌「すみよしの…」は、有名な後三条院の住吉御幸の折のもので、延久五（一〇七三）年二月の詠作である。『榮花物語』（松のしずえ）に御幸の様子が詳細に記述されているほか、供奉の人々の歌も勅撰集をはじめ諸集に多数採録されている。この匡房歌は『万代集』（神祇・一五四六）に見える。

一七八番歌「しにおちし…」は、後三条院が崩御した延久五（一〇七三）年の秋の歌。詞書にある「ゑそう寺」とは円宗寺で、この寺は早くに無くなっているが、後三条院の御願寺であり、陵墓が営まれた寺であった。『金葉集』の、皇子輔仁親王の歌に寺名が見える。

円宗寺の花を御覽じて後三条院御事などおぼしいでてよませ給ひける
三宮

うゑおきし君もなきよにとしへたる花はわが身のこちこそすれ
（雜上・五一八）

現在、この後三条天皇円宗寺陵は、後朱雀天皇円乗寺陵・後冷泉天皇円教寺陵と互いに隣接した形で龍安寺寺域（龍安寺方丈の北側）に存している。

三〇九番歌「ふちころも…」も、後三条院が崩御した延久五年の年末の詠作と知られる。住吉神主の津守国基は、この三〇八番にのみ名が見える。後三条院は住吉御幸からわずか三月ほどで崩御したので、御幸に近侍した者にも、迎えた住吉の神官らにも、悲嘆の思いがとりわけ深かったであろう。

3 春宮

春宮に關係する歌は、次の二首である。

鳥羽殿の春宮と申しし時、殿上、松哥在序

ちとせふるまつにかかれるふぢのはなきみがころものいろかとぞみ
る (二五七)

春宮の御前にての哥、たけのかぜあめのごとしといふ題を、鳥

羽殿

かぜふけばをささのはらにすむ人はただひとむらのあめかとぞきく
(三二〇)

このうち、一五七番歌「ちとせふる…」は、詞書に「鳥羽殿の春宮と申しし時」と明示されているので、白河院の春宮時代の詠作である。しかし、三一〇番歌「かぜふけば…」の場合は、詞書末尾の「鳥羽殿」を、詠作場所を示す注記と見るか、「春宮」＝白河院であることを示す注記と考えるのか、の問題がある。そこで、三一〇番歌と同題で、時代も同じと考えられる歌を検索してみると、次の一首がある。詞書には詠作状況は示されていないものの、同時詠と思われる。

竹風如雨といへることをよめる 中納言基長

なよ竹のおとにぞ袖をかつぎつるぬれぬにこそは風としりぬれ

(金葉・冬・二六四)

作者の基長は内大臣藤原能長(白河院の外祖父)の子で、後三条天皇時代の延久四(一〇七二)年に参議従二位となっており、その時期には父能長が権大納言兼春宮大夫でもあった。従って基長が春宮(白河院)御前の歌会に連なつたことは十分に考えられる。白河院は、延久元(一〇六九)年四月に立坊し、同四(一〇七二)年十二月に即位しているの

すると、匡房の活躍した時代では、次の「梅花久薫」二首がある。

永保二年二月きさいの宮にて、梅花久薫といへるところをよみ
侍りける 久我前太政大臣(源雅実)

かをる香のたえせぬ春はむめの花ふきくる風やのどけかるらん

(千載・春上・一八)

梅花久薫

おそくちるあはれのみかはむめのはないづれのはるかにほはざるべ
き (経信集・七)

一方、「水左記」永保三年二月十六日条に「内二御遊び有り。和歌題梅花久薫、題序匡房朝臣也」との記録があり、『千載集』詞書の「二年」は「三年」の誤りの可能性が高い。いづれにしろ、白河天皇時代の詠作で、中宮は賢子と考えられる。

また、一一三番歌「ちぢのあき…」の場合も、同時期の資料を見出すことができる。

永保二年九月きさいの宮にて、菊はるかなるとしを契るといふ
ことを人人よみ侍りけるに 後二条の関白

九重のうちに八重さくしら菊のはなは千とせのはじめなりける

(秋風集・賀・六五〇)

菊契週年

菊のさく谷のながれをくむひとやおほくの秋をすぎむとすらむ

(経信集・一二五)

「九重の…」の作者「後二条の関白」は師通。これによれば、一六番歌と同様に、中宮は賢子となる。この場合、詞書末尾の「鳥羽院」は、「白河院の中宮」であることを示す注記となる。ただし、「鳥羽院」を場所を示す注記と解釈するならば、詠作年代は異なり、中宮は郁芳門院姫

一五七番・三一〇番はともにその三年半余りの間の詠作と考えられる。

4 中宮

中宮關係の歌は次の三首である。

中宮のえむに、梅花ひさしくにほふ

このへにやへさくむめはことしよりよろづよかねてにほふばかり
ぞ (二六)

中宮のえんに、花千年をちぎる有序

いはねどもいろにぞしるきさくらばな君が千とせのはるのはじめは
な (二九)

中宮菊契週年有序鳥羽院

ちぢのあきよろづのあきをたのむかなあきのみやなるしらぎくのは
な (一一三)

匡房が活躍した後三条朝から鳥羽朝期の中宮としては、白河天皇中宮賢子、堀河天皇中宮篤子が考えられる。

藤原賢子(一〇五七〜八四)：白河天皇中宮。藤原師実の養女(実父・

六条右大臣源顕房)。延久三(一〇七二)年三月、東宮妃。承保元

(一〇七五)年立后。天皇の寵愛を一身に受け、二男三女を産む(長子敦文親王は夭折)も、応徳元(一〇八四)年九月、崩御。

篤子内親王(一〇六〇〜一一一四)：後三条院の第四皇女。母は藤

原茂子。延久五(一〇七三)年三月、斎院卜定。同年六月、父院

崩御により退下。寛治五(一〇九二)年十月、堀河天皇に入内し、

同七(一〇九三)年二月立后。嘉祥二(一一〇七)年九月出家。永

久二年、堀河院で崩御。

一六番歌「このへに…」について、題「梅花久にほふ」に沿って調査

子内親王(堀河天皇准母として中宮であったのは二年間ほど)を考える必要も生じる。しかし、「鳥羽院」の上に「於」も無く、場所を示している可能性は低いであろう。

二九番歌「いはねども…」は、『続後撰集』に採られている。

永長元年三月、おなじく花契千年といふことを序たてまつりて

前中納言匡房

いはねども色にぞしるき桜花きみが千歳の春のはじめは

(賀・一三四五)

これと同時期で、同題の歌に、

永長元年中殿にて、花契千年

咲きそむる若木の梅も見つれども千歳の春にかみさびぬべし

(京極大殿御集・二八)

があるが、当該二九番歌では桜、『京極大殿御集』二八番歌は梅で、花の種類が異なる。また、『続後撰』の匡房詠は、詞書の「おなじく」が前歌詞書を承けて「中殿にて」を意味すると考えられ、詠作場所の問題もある。

『中右記』によれば、この永長元(一〇九六)年三月には、清涼殿で堀河天皇による最初の和歌御会の記録があり、匡房もその座に連なっている。

「今夕於御前初有和歌、先兼題被出題、花契千年、…大殿・関白殿・中宮太夫師…治部卿通・江中納言匡…(以下略)」

〔中右記〕永長元年三月十一日条

しかし、これは「中宮の宴」ではない。匡房の記憶違いであろうか。ただ、中宮篤子のもとで詠まれた歌の資料として、

おなじ御時、きさいのみやにて花契週年といへる心を、うへの

をのこともつかうまつりけるに、よませたまうける

堀河院御製

千とせまでをりてみるべき桜花こずゑはるかにさきそめにけり

(千載・賀・六一二)

がある。「週年」は「千年」と同意で、同時詠でありながら題ではこの二語が入れ替わっているというような例もある。ここでは、二九番歌では「中宮」は篤子内親王と考える。

5 郁芳門院姫子内親王(六条院・齋宮)

この集には「六条院」と明示した歌合の詠が二首ある。六条院は、白河院が讓位後に「六条内裏」を後院として整備させたもので、院は寛治五年八月に、郁芳門院とともに移り住んだ。匡房の場合、「六条院」は場所を示すだけでなく、姫子内親王を指す意を含めて用いているらしい。また底本に「齋院」とあるものの「齋宮」かと思われる一首がある。

六条院のねあはせに左

ゆふづく日いれはおぐらのやまのはにをちかへりなくほとときすかな
(五三)

六条院のおき左

あきかぜのそよぐをとのみたえずしていづらはおきのはるのやけはら
(一〇四)

あき、齋院の野の宮

あきの野のはぎのにしきをきて見ればそでうちふらんみちだにもなし
(七八)

このうたはつねひらの朝臣所来感也

郁芳門院姫子内親王(二〇七六―一〇九六)は、白河院第一皇女(母は

に行われ、右方の行宗が勝ちとなった。

七八番歌「あきの野の…」は、『統詞花集』に採録されている。

齋宮の野宮にて人人はぎの歌よみ侍りけるに 大藏卿匡房

あきの野のはぎのにしきをきてみれば袖うちふらんみちだにもなし
(秋下・二二〇)

底本には「齋院」とあるが、「野の宮」ならば「齋宮」が相応しいであろう。また、左注に見える「つねひら」は、儒者歌人の藤原経衡(一〇〇五頃―一〇七八以後)と考えられる。姫子内親王の野宮入りは承暦三(二〇七八)年九月八日、伊勢参向は同四年九月十五日であるが、この間には母の賢子中宮が幼い内親王を案じて野宮へ行啓している(『帥記』承暦四年閏八月二十六日条等)。内親王や中宮に供奉した廷臣らが野宮で歌を詠む機会もあったであろう。以上のことから、当該歌は郁芳門院姫子内親王関係の歌で、承暦三年秋か四年秋の歌と考えられる。経衡の名はこの箇所のみである。経衡の最晩年期である。

6 齋院(特定困難)

松契遊年 齋院 可尋書問題、人にかはりて

きみがよはくもにみゆるまつやまのはごとくにちよをかぞふばかりぞ
(一五〇)

この歌に関しては、他出及び同時詠とおぼしき歌が見当たらないので、現段階では齋院が誰であるか分からず、詠作年次も未詳。

ただ、堀河天皇時代の康和元(一〇九九)年四月三日、齋院令子内親王のもとで「松水に映ず」題で和歌が講じられたことが『中右記』に見える。令子内親王(二〇七八―一一四四)は、白河院皇女で郁芳門院姫子内親王の同母妹。誕生直後から摂関家の師実夫妻のもとで養育され、

中宮賢子)、承暦二(二〇七八)年、齋宮卜定。同四(二〇八〇)年、伊勢参向。応徳元(二〇八四年)母后崩御により退下、帰京。寛治五(二〇九二年)正月、堀河天皇准母として中宮。同七(二〇九三年)正月、女御篤子内親王が中宮となるのに先立ち、院号を受けて郁芳門院となる。白河院の最愛の皇女で、その崩御により院は出家した。

五三番歌「ゆふづく日…」は、寛治七(二〇九三年)五月五日の「郁芳門院根合」のもので、この歌合は六条院の寝殿で行われた。郁芳門院の女房に、廷臣らと内裏及び白河院の女房らを加えた形で行われ、実態としては白河院が主催したと言ってもよいものである。匡房は右方で参加しているが、集の詞書は「左」と付す。

二番 郭公、左

大式

ひとこゑをまたれたまたれて郭公いくよといふに今夜なくらむ

右 先読、前番負也

左大弁匡房

ゆふづく日いれはをぐらの山のはにをちかへりなく時鳥かな

一〇四番歌「あきかぜの…」は、嘉保二(二〇九五)年八月二八日の「郁芳門院前裁合」の歌である。この歌合の開催場所は鳥羽殿で、「根合」同様、実質的主催者は白河院であるが、鳥羽殿で開催されても「六条院の」とするのは、「六条院」に郁芳門院を指す意味を持たせているためと考えられる。匡房は左方で、次のように源行宗の歌と番われた。

匡房

秋風にそよぐ音のみ絶えずしていづらは春の萩のやけはら

行宗

物毎に秋のけしきはしるけれど先づ身にしむは萩のうは風

『袋草紙』上巻の逸話によれば、匡房歌はこの一首のみで、判者の源俊房に「愚詠の萩の歌に御芳心有るべき」云々と要請したが、判は公平

寛治三(二〇八九)年六月齋院卜定、康和元年六月退下。退下後は内裏にも住み、堀河天皇崩御の後、鳥羽天皇准母として立后、後年は二条大宮と呼ばれた。この集の後半部には令子内親王家女房が四人も登場するので、ここに言う齋院が令子内親王である可能性は少なくないと思われるものの、当該歌の題「松契遊年」が、『中右記』に言う「松水に映ず」とは大きく異なるため、引き続き検討を要する。

三 前半部に見える摂関家の人物名と歌

ここでは、関白殿・内大臣殿・博陸殿・大殿と呼ばれている人物及び「宇治殿」で示されている人物についての考察を述べる。

7 関白

これについては、更に、a 師実(関白殿・大殿)、b 師通(内大臣殿・博陸殿)、c 現時点では特定できない(関白殿)に、分類される。

a 師実(関白殿・大殿)

師実(二〇四二―一一〇二)は、関白頼通の子。承保二(二〇七五)年十月、氏長者、関白。応徳三(二〇八六年)十一月、堀河天皇即位により摂政、寛治二(二〇八八年)年太政大臣。嘉保元(二〇九四年)年、上表し関白・氏長者を師通に譲る。晩年に京極殿に住んだことから「京極前関白」と呼ばれた。

師実関係歌は、その可能性が高いものを含めて次の七首。

関白殿の五番哥合花持

しらくもと見ゆるにしるしみよしののよしののやまのはなざかりか

も (三九)

関白殿の五番哥合

ほととぎすくもぬはるかなのればやあさくらやまのよそになくらん (五四)

関白殿の五番哥合、月勝

あふさかのせきのすぎはらしたはれてつきのもるにぞまかせたりける (二〇一)

関白殿の五番哥合に、ゆき

みかりのはかつふるゆきにうづもれてとだちもみえずくさがくれつつ (二二三)

関白殿の五番哥

きみがよはくもりもあらじみかさ山みねのあさひのささんかぎりは (二五五)

関白殿薨給後

あさゆふにこふるなみだをとりかへしはちすのうゑのつゆとなさばや (二八五)

大殿、九月十三夜

月ごとに見るとはすれどながつきのこよひのつきにしくつきぞなき (九五)

このうち、三九・五四・一〇一・一二三・一五五番歌の五首は、詞書には「関白殿の五番哥合」とあるが、寛治八(一〇九四)年八月十九日に行われた「高陽院七番歌合」のものである。これは五十年前の頼通による「賀陽院水閣歌合」を意識した盛儀歌合であり、四季題(桜・郭公・月・雪)と祝の五題七番であったが、匡房は「五番歌合」と誤り記している。五首のうち三首が勅撰集に採録されており、「しらくもと」・「あふさかの

…」は、ともに『詞花集』(春・二二、雜上・三〇七)に、「みかりのは…」も『新古今集』(冬・六八七)に見える。

「一八五番歌」あさゆふに…」は、後掲の一八二番歌(詞書「夢中奉見故博陸殿」)より後ろに置かれており、敢えて呼称を変えている等の点から、ここに言う関白は師実の可能性が高いと考える。また、九五番歌「月ことに…」は、師実邸で「九月十三夜」の宴があった可能性を示す次の和歌資料により、「大殿」を師実と判断しているが、確実な史料については未詳である。

九月十三夜に京極の前関白家にて、翫月といふことをよみ侍りける 堀川入道前左大臣

たぐひなくさやけき物はよのなかなは長月の月にぞ有りける

作者の「堀川入道前左大臣」とは源俊房(一〇三五―一二二二)である。(秋風集・秋下・三七九)

b 師通(内大臣・博陸)

師通(一〇六二―九九九)は、承保四(一〇七七)年三月、十六歳で正三位参議、永保三(一〇八三)年内大臣。関白は寛治八(一〇九四)年三月薨。「後二条関白」と呼ばれる。学問を好み、匡房らを師とした。師通に関係した歌と考えられるのは、次の三首。

内大臣殿遠山桜有序

たかさこのおのへのさくらさきにけりとやまのかすみたたずもあらなん (二二三)

夢中奉見故博陸殿

むばたまにこひしき人を見つるよはゆめのうちにてよをつくさばや (二八二)

はるくればみやまのゆきもきえぬべみなどわかそでのこほりますらん (一八三)

二三番歌「たかさこの…」は、匡房の代表歌として知られる歌で、『後拾遺集』以下、多数の歌論等に採られ、百人一首の歌としても知られる。

内大まうちぎみのいへにて人人さけたうべてうたよみ侍けるに、はるかに山ざくらをのぞむといふ心をよめる

大江匡房朝臣

高砂のをのへの桜さきにけりと山のかすみたたずもあらなん

(後拾遺・春上、一二〇)

師通は、永保三(一〇八三)年正月二十六日に内大臣に任じられてから、寛治八(一〇九四)年三月九日に関白となった後も、内大臣を兼ね続けた。しかし、内大臣殿と呼ばれるのに相応しいのは、やはり関白になる以前のおよそ十一年間であろう。

一八二・三番歌「むばたまに…」は「はるくれば…」の哀傷二首は、「夢中奉見故博陸殿」という詞書が注目される。「博陸」は関白の唐名であるが、『江帥集』に於いて漢文体の詞書は十箇所程度と少ない上、内容も「下向美作間、於播磨二見浦、曉開郭公ヲ」(一六二)「於大宰府思京洛間、聞雁」(一七一)等、私的な歌の場合に付される傾向が窺われる。そして、この二首が置かれているのは、承徳二(一〇九八)年十一月の藤原基忠薨去に際しての贈答歌の後である。その基忠薨去関係歌の前は後三条院崩御の年の歌である。この二首を師通薨去(承徳三年六月)関係歌と見、前掲の一八五番歌「関白殿薨給後」を師実薨去関係と仮定すると、哀傷歌は概ね年代順に並べられていることになり、「博陸殿」と「関白殿」との呼称の違いの問題も含めて、理解しやすいように思われる。匡房は、師通とは学問の師弟として親しい関係にあったと想像され

る。師通を親愛の情をこめて「博陸殿」と呼び、「恋しき人」と歌ったのではないか。

c 特定できない関白

これに該当するのは次の一首。

関白殿の八月十五夜

ふるさとにこよひのつきのかくしあらばにしきをきてもかへるばかりぞ (九二二)

次の資料によれば、この「関白」は教通若しくは師通である可能性がある。

二条関白家の八月十五夜歌合に 周防内侍

かくばかりさやけきかげはいにしへの秋のそらにもあらじとぞ見る

(続後撰・秋中・三三五)

後の二条殿の八月十五夜月の宴させ給ふとて歌めししかば参らせし、水上月

秋の夜も氷むすぶとみゆるまで水のおもしろく照す月影

(撰津集・二三)

大二条殿と呼ばれた教通(九九六―一〇七五)は、治暦四(一〇六八)年四月から薨去まで関白であった。周防内侍は後冷泉朝から堀河朝まで活躍した女房歌人であるから、『続後撰集』三三五番歌に言う「二条関白」は、教通である可能性がある。一方、『撰津集』二三番歌の「後の二条殿」は師通である。教通と師通のどちらかで考えたとすると、匡房との関係からは、師通のほうが可能性が高い。

しかし、『江帥集』では「関白殿」とあるのみで、「八月十五夜」の月の宴も少なくないと思われるので、ここに言う関白が師実である可能性も高いし、更に言うなら頼通である可能性も完全には排除し難いであ

ろう。それらのことから、現段階では未詳とする。

8 宇治殿

これまで検討した「関白」等の中には、頼通と特定できる人物はいない。頼通の呼称として知られる「宇治殿」は、この集では、場所（邸宅）を示す呼称としてのみ用いられるが、この章では撰関家関係の人名と歌を整理したので、これも併せて示しておく。

宇治殿の扇合の哥左方

ひさかたのそらなるほしにたぐはずはひととぞ見ましあきのよの月
(一〇〇)

宇治殿の哥合、もみち

くれぬともなにかいそがむもみちばのしたてるやまはよるもこえな
(一一五)

一〇〇番歌「ひさかたの…」一一五番歌「くれぬとも…」は、ともに寛治三（一〇八九）年八月二十三日の「四条宮扇合」の歌である。判者は民部卿経信。「月・霧・萩・鹿・雁・紅葉」の六題、二番ずつ（計十二番）の歌合であった。匡房の歌は右方で、「月・萩・紅葉」の三首が入っているが、この集には「月」と「紅葉」の二首のみを収める。また、歌合記録には混乱があり、「紅葉」の歌など、左右とも勝ちになっている。以下、歌合本文から匡房歌の箇所のみを示す。

月 左ち

びちう

三 かもめゐるしららのほまのみなそこにそのたまみゆるあきのよの月
右 まさふさ

四 ひさかたのそらなるほしにたぐはずはひととぞ見まし秋のよの

所収『江帥集』

(2) 有吉 保『江帥集』解題（『私家集大成 中古Ⅱ』及び『新編 私家集大成』）等

(3) 山口 和美『匡房集』の成立と編集方法（『和歌文学研究』第九号 二〇〇五年 十二月）

(4) 竹下 豊「晴の家集―堀河百首歌人の家集を中心に―」（和歌文学論集 4『王朝私家集の成立と展開』一九九二年 風間書房）

(5) 戸谷三都江「大江匡房の歌」（『文学・語学』十九号 一九六一年）、本間洋一「大江匡房の和歌―和漢兼作家の表現―」（『國語と國文学』一九九〇年二月）、川村晃生「大江匡房の和歌」（『国文学 解釈と鑑賞』第六〇巻一〇号 一九九五年 至文堂）等

(6) 拙稿「江帥集」後半部に関する二、三の考察―『大武集』作者と匡房、「三位殿」と匡房―（『都留文科大学研究紀要』第八二集 二〇一五年十月）

(7) 以下、引用は冷泉家時雨亭叢書第十八巻『平安私家集 五』所収の『江帥集』により、読み易さを考えて、踊り字は仮名にし、読点および濁点を施した。

(8) 注4に同じ

本稿は「平安文学の会」平成二十七年八月例会（平成二十七年八月二十九日 於・武蔵野大学三鷹サテライト教室）における発表内容に基づく。当日ご教示下さった諸先生方に深く御礼申し上げます。

つき

はぎ 左

びちう

九 かぜふけばゆきもやられずみやぎののこはぎがはらのなびくけしきに

右かつ

右大弁匡房

一〇 草まくらたびのしるしと見ゆばかりころもにほはせをののはぎはら

紅葉

左勝

としより

二一 おとは山もみぢちるらしあふさかのせきのをがはにしきおりしく

右かつ

まさふさ

二二 ゆふさればなにそぐらんもみぢばのしたてる山はよるももえなむ

四条宮寛子（一〇三六―一二二七）は、関白頼通女、後冷泉天皇皇后。永承五（一〇五〇）年入内。天喜四（一〇五六）年に「皇后宮春秋歌合」を催した。治暦四（一〇六八）年出家。里第に因んで「四条后」と呼ばれた。頼通の遺産を多く相続し、晩年は宇治の別業に住み、そこで「扇合」を催した。なお、この集前半部では、寛子の女房らを示す際には「四条宮」「皇后宮」等を冠した呼称を用い、「宇治殿」を冠することはない。

以上、天皇家関係、撰関家関係の人物等を整理・検討した結果を述べた。紙幅の関係から、廷臣・女房らに関する整理と考察は別稿に譲る。

注

(1) 冷泉家時雨亭叢書第十八巻『平安私家集五』（朝日新聞社 一九九七年）